る國語で記せる文書の中に見ゆる kṣuṁ なる語と同一に用いられて居るやうで、從がつてまた同一意味で無けねばならぬ。思ふに kṣāṇa はゼンド語の xšāy が基で、ソグド語では xsevanē (王)、xšāvan (力) 等の語を生じ、ペルシヤ語では šāh なる語を生じてゐるもので、支配 (rule)、統治 (reign) などの意味ある名詞と見るべきであらう、文書に kṣāṇa salī と續けて見にてゐるのは、「統治の年」(year of the rule, regnal year) の意と思はれる。而して支那の屬地に於て此の統治年で年次を記することは恐らく支那の年號を眞似たものと見るべきであらう。龜茲語の kṣuṁ は此の kṣāṇa より借りたものである。』

此の說が正しいならば前に述べた Lévi 氏の推察はこゝに證明を得たことになる。

以上はたゞ兩論文の主要點の大意を紹介したばかりである、若し議すべくば多少の疑の存する所ないでもなからうが、それは兩論文の價値に關する程のものではない、兩者ともに研究の行き方が極めて鮮やかで、僅かな記錄の斷片から頗ぶる大なる結果を齎らし得たものである。

(史林第二卷第三號、大正六年七月)